

「あいや者共、誰かある、小姓たりと騎士たりと
われと思はん者あらば いでこの淵に潜っても見よ、
これなる黄金[こがね]の盞[さかずき]を それ、この通り投げたが如何に、
大海原の鰐口[わにぐち]があれ、一息に嚙[の]みしを見よ、
われと思はん者は誰[た]そ、潜つてあれを拾うて参れ、
拾うて参った其の者に 余は盞をつかはす可し。

かく呼ばはりて、涯[はて]しなき大海原を瞰下[みおろ]しつ
さながら虚空を衝[つ]くがごと そそり立ったる屏風岩[びょうぶいわ]
極まるところ絶端に 佇[たたず]みありし國王は
波立ち騒ぐカリユブデに 見よ、盞を投げ入れぬ。
「重ねて問はん、誰かある、 われと思はん者は誰[た]そ、
いで、此の淵に潜らんずる 勇ある者は打って出[い]でよ！」

綺羅星のごとく國王の 左右に侍[はんべ]る騎士小姓、
意外の言葉に氣を吞まれ ただ黙々とたたずみて
寄せては返す荒浪を 足下遙かに眺めつつ、
さらば拙者が頂戴と 罷[まか]りて出でん者も無し。
王此の様に色を作し 更に呼ばはり申すらく：
「どうちや、返辭[へんじ]はまだ無きか、いかが召された、各々[おのおの]方。」

満座いづれも聲を吞み 靜まる程に、 思ひきや、
朋輩共[ほうはいども]を尻目に懸け 優[やさ]しの眉宇[びう]に可憐[かれん]にも
決死の色を漲[みなぎ]らせ やをら起ちたる小姓あり。
進み出づるや帶マント 決然かなぐり棄てければ、
並み居る騎士を初めとし 淑女の群に至るまで
此の姿よき若人[わこうど]を ただ惘然[ぼうぜん]と見やるのみ。

やがての事に絶壁の 眞際に近く降り立ちて
顎[あぎと]に似たる深潭[しんたん]の 様[さま]や如何にと見下ろせば
既に先程カリユブデの 洞[ほら]に吸はれし激浪は
此の時どつと溢れ出で 岩を噛みてぞ咆[ほ]え猛[たけ]り、
見下ろす彼方ぬばたまの 闇に湧き立ち騒ぐ音[ね]は
鈸[こだま]に返す遠雷の 殷々[いんいん]たるにさも似たり。

湧き立ち返り、煮え沸[たぎ]り どよめき騒立[さわだ]つ其の様は
烈火に水を注ぐがごと、 壯絶言はん方もなく、
飛沫は遙か天に冲[ちゅう]し 繁吹[しぶ]きの狭霧[さぎり]は眞白に棚引き、
押しのけ、搔き分け、揉み合ひ、重なり、被せつ疊みつ湧き立つ潮、
組んづほぐれつ漲[みなぎ]り溢れ、 湧けども湧けども湧けども尽きず、
わだつみ更にわだつみを 産まんとするが如くなり。

さしも猛りし満潮[あげしお]の 勢やがて衰ふれば、
雪なす泡の只中に 眼[まなこ]も昏[くら]む烏羽玉[うばたま]の
常夜の闇と瞬きて 豁[くわっ]と裂けたる岩狭間[いわはざま]、

転び墜つれば眞逆様、 地獄の底にも至りぬべく、
地軸もとどろに鳴る汐の 吸はれ吸はれて滔々[とうとう]と
漏斗[じょうご]の口をひたぶるに 渦巻き降[くだ]るぞ凄[すさ]まじき。

時こそよけれ逆潮[さかしお]の 卷きて返さぬ其の程にと、
神明の手に我が命 托する祈禱[きとう]の一刹那、-----
素破[すわ]と微かに異口同音 満座思はず立ちすくめば、
見るより早く退汐[ひきしお]の 渦に吞まれて影も無し。
瞰下ろす足下千仞[せんじん]の 鬼氣漂はす水の面[おも]、
固く鎖[とど]して今ははた 行方知れずなりにける。

彼静まれる深潭の 水面[みのも]は既に寂[じゃく]として
深きに潜む洞[うつろ]のみ 陰[いん]に籠[こも]りて轟[とどろ]けば、
我人[われひと]共に胸逼[せま]り、 打ち戦[おのの]きつ口々に
あはれ健氣[けなげ]の若人よ 今はさらばと呟[つぶや]くのみ。
洞[ほら]なす奥に罅[こだま]しつ とどろとどろと絶え入る音は
待つ間[ま]苦しう遅滞[ながび]きて 恐ろしと云ふもおろかなり。

よし我君が此の砌[みぎ]り 御冠[おんかんむり]をしも擲[な]げ給ひ
拾ひ來たらん其者は 之を頭[こうべ]に戴く可し、
我に代りて萬乗[ばんじょう]の 位に即[つ]けむと曰[のたま]ふとも、
嗟[ああ]確か能くかりそめに 心惹[ひ]かれて惑ふべき。
吠えたけぶ彼方淵の奥 そも何者ばし潜みたる、
日の眼を仰ぐ生霊は 得も語らじと覺えたり。

そも往昔[いにしえ]より此の渦に 船足絡[から]み傾[かたぶ]きて
水底[みなそこ]深く墜ち行きし 巨船は多し、嗟[ああ]、されど
なべてを吞みて黙したる 墓穴を蹴[あが]き出で來しは
打ち碎かれし龍骨か 挫[ひし]ぎ折れたる帆柱か。
かくする程に刻一刻 迫る嵐の氣配して
いや益しつものるざわめきも 今は真近かに聴き取れぬ。

湧き立ち返り、煮え沸[たぎ]り どよめき騒立[さわだ]つ其の様は
烈火に水を注ぐがごと、 壯絶言はん方もなく、
飛沫は遙か天に沖し、繁吹[しぶ]きの狭霧[さぎり]は眞白に棚引き、
押しのけ、搔き分け、揉[も]み合ひ、重なり、被せつ畳みつ湧き立つ潮、
闇なす奥の彼方より 雄叫[おたけ]び躍り出づる音[ね]は
罅[こだま]に返す遠雷の 股々たるにさも似たり。

さる程に、見よ、黒々と 漲[みなぎ]る潮の懷[ふところ]より
それと覺しく浮かび出[い]で 眞白[ましろ]に揺[ゆ]らぐ物の影、
腕[かいな]あらはれ、やがてまた 雪を欺く項[うなじ]見え、
力にまかせて波を切り、 浮きつ沈みつ跳[あが]けるは
まさしくかれが姿なり！ 左手[ゆんで]に高く捧げ持ち
悦び面[おもて]に溢[あふ]れつつ 打ち振り翳[かざ]すは蓋[さかずき]なり！

且つは泌々[しみじみ]と息を吸ひ 且つはつくづくと息を吐き、
光のどけき現世[うつしよ]の 滄[かわ]らぬ姿なつかしめば、
人々勇み歡びて 皆口々に呼ばはりぬ：
「かれ恚[つつが]なし！かれ生けり！かれは虎口を遁[のが]れたり！
墓穴を後に水底[みなそこ]の 渦卷く潮[うしお]搔き分けて
九死の巷[ちまた]に一生を 奇[くす]しくも得しものかな！」と。

小姓はやがて諸人[もろびと]の 歡呼の聲に迎へられ
還[かえ]り來るやおもむろに 王の御前に跪[ひざまず]き、
擲げ給ひしは此の蓋[さかずき] あらため給へと差出[さしいだ]せば、
王は則ち側[かたえ]なる 優しの王女さし招き、

珠と閃[きらめ]く美酒[うましぎけ] 波々ところそ注がせけれ。
若者之を受けたる後 王に語りて言へらくは：

「壽[いのち]永[なが]かれ我君よ！ 転[うた]た惟[おも]ふにたまゆらの
いぶき通ひて天つ日を をろがむ者こそめでたけれ！
日の眼に乖[そむ]く彼の奥は あな恐ろしの常夜[とこよ]かな、
人たる身もて神明に 楯突き挑むは曲事[まがごと]ぞ、
また神明の故ありて 夜見路[よみじ]の闇に秘め給ふ
ものの姿はかりそめにも 発[あば]くまじとぞ覺え候。

飛ぶ矢の如き勢もて 掠[さら]はれ墮[お]ちゆく時しもあれ、
忽ち行手を遮切[さえぎ]りて 岩間に開く深坑[ふかあな]より
どっと潮の噴き出でつ 我を迎へて寄せ來るあり、
波と是との反噬[かみあい]に 得も退かず得も往かず、
しばしが程は転々と 眼[まなこ]も暈[くら]む速さもて
まんじ巴[ともえ]と曳き廻され 抗[あがな]ふ術[すべ]とてなかりしが、

萬策尽きたる今はの際[きわ] 頼むは神の御力[みちから]のみ
助け給へと神の御名[みな] 心に唱へし甲斐あつてか、
奈落の底より忽ちに 現はれ出でたる救ひの岩角、
むんづと之れに獅嚙[しが]みつき、 九死に一生得て見れば、
ああら不思議や、盞[さかずき]も 珊瑚に懸かりて眞近かに在り！
此の枝一つに奇[くす]しくも 転[ころ]び落ちずてありけるなり。

如何となれば、見はるかす 彼方は今猶ほ幾千尋[いくちひろ]、
紫金[しこん]の闇に閉されつ、 杳[よう]と霞みて見え辨[わか]ず、
耳元近くは閑寂[げきせき]と 寢[い]ね静まりて聲無きに、
まだ眼[まなこ]のみ慄然と わななき見守る眼の下は
火蟪蛄[ひいもり]、蜥蜴[とかげ]、山椒魚、鰐[わに]、怪龍の蠢々[しゅんしゅん]と
犇[ひし]めきのた打ち屯[たむろ]する 身の毛もよだつ洞窟なり。

見渡す限り眞黒[まくろ]に蠢[うごめ]き 物すさまじく塊[かたま]り纏[もつ]れて、
彼方に一群[ひとむら]、此方に一山、醜怪凄愴名狀し難き
逆棘[さかとげ]立つたる雁木鯉[がんぎえい]、 色毒々しき蝶々魚、
寄らば突かんと身構へたる 異形の怪物撞木鮫[しゅもくざめ]、
闇に仄々[ほのぼの]笑みたる如く 牙むき出して蹲踞[うずくま]る
大海原の鬣狗[たてがみいぬ] あな恐ろしの鰻[ふか]の群！

かかる狭中[さなか]に懸かりては 生きたる心地の候ふべき、
絶對無人の境[きょう]なれば 助けを呼ばん方もなく、
魑魅魍魎[ちみもうりょう]の只中に 有情[うじょう]の胸のただ一つ、
神人[かみひと]共に見難せし 空おそろしの寄邊なさ、
人の語らひ世のさざめき 距[へだ]つる闇の幾千尋、
咫尺[しせき]の裡[うち]に相見[あいまみ]ゆる 夜見路の涯なる荒ぶる神々！

如何はせむと打ち戦[おのの]き 思ひ亂るる時しもあれ
百千[ももち]の手足一時にうごめき 這い寄り詰め寄せ、顎[あぎと]を開き、
矢庭にひらりと身を翻[ひるが]へし 飛びつかんずる気配に仰天、
縋[すが]り持ちたる珊瑚の細枝 後先覺えず手離す折しも、
此の時忽ち奔馬[ほんば]の如く 渦巻く怒濤に身を攫[さら]はれぬ。
實[げ]に神助[しんじょ]とや申すべき、此の瀬に卷かれつ浮びて候。」

一部始終の物語に 且つは訝[いぶか]り、且つはまた

打ち興じたる王の云ふ：「この盞は申すに及ばず
かてて加へて更に又 稀代の寶珠もて飾る
此の指環をも其方[そのほう]に 望みとあらばつかはさむ、
但し、ふたたび潜り來よ、 再び潜りて彼方なる
水底[みなそこ]に見し事どもをば つぶさに語り聞かせよかし！」

王の娘は之れを聞き、 やさしの心や動きけむ、
言葉巧みに云ひなしつ 哀れを乞うて申す様：
「さりとは酷[むご]き御戲事[おんざれごと] 程よき處に止めませ、
余人の期せぬ生環を 遂げ來つること奇特なり、
思ひ止まり給はむこと 難しとならば詮もなし、
小姓わっぱを何かせん、 いで騎士共に御命あれ！」

言はせもあへず国王は 矢庭に素手に掴み
渦巻く怒濤の只中に 發矢[はっし]と投げ入れ申す様：
「この盞を爾[なんじ]もし 再び拾ひ來りなば、
元服其の場に差し許し、 騎士の頭[かしら]と勅諭[ちよくじょう]せしむ、
且つは爾に不憫を懸け 庇[かば]ひ立てする此の王女、
今日[こんにち]此の日妻として 爾に娶合[めあわ]せ取らさうぞ！」

聞くより若者なじかは知らねど いみじき力に心をほだされ、
顔面相貌見る見る一變 不敵の決意に眼差し輝く。
ましてやその時、みめよき姿の 紅葉と染めたる可憐の顔[かんばせ]、
忽ち色失せ悶絶する様 眺めて何條ためらふ可き、
男と生れて今日此の刻[とき] 此の賞かち得で退くべきものは、
生きなば生きよ、死なば死ね、 さらば、とばかり飛び込んだり！

岸打つ浪は音高く 寄せては返しまた寄すれど、
寄せ來る潮は地を揺がせ とどろとどろと鳴り旺[さか]れど
旺れば素破と身を屈め 探り見、あくがれ、眼を瞠[みは]れど、
潮は漲り、満ち、溢れ、打ち寄せ打ち寄せ盛り返せど、
上げ來る潮の騒ぎにも 退き行く潮の響[どよ]みにも、
海に潜りし若者の 沙汰は聞えずなりにける。

抒情挿曲 序 曲

H. ハイネ作・関口存男訳

むかしひとりの居士[こじ]ありき、世をはかなみて物言はず
頬[ほほ]落ちくぼみ顔あをく ただ眼玉のみぎよろりとして
いぶせき夢にも息づまり 暗き想ひにむすぼれて、
右によろめき左にのめり 世をふらふらと渡りけり。
諸事間が抜けてお目度く ぶきつちよにして へまなれば
あんよはお上手轉[ころ]ぶはお下手と つまづきまろびつ過ぎ行く所
路傍の花も乙女らも 面[おもて]そむけてぷと吹き出しぬ。
家にかへれば薄暗き 隅を求めて蹲踞[うずくま]り
世の常人[つねびと]のさかしらを しばしのがれて寛[くつ]ろぎしが、

その時やをら動き出で 腕さしのべ長嘆息、
虎空を睨むことあれど なに口走ることもなし。
やがて小夜更け丑滿つの 頃ともなれば、あら不思議、
夜暗妖しく鳴動し 虚空に微妙の響あり-----
頃しもあれや戸の外に 膽[きも]おどろかす敲扉[ノック]の音。
現れ出でたる異形の姿は 人目を忍ぶ居士が恋人、

浪のざわめき飛沫[しぶき]の衣 纏[まと]へる海のもののけなり。
嬋娟[せんけん]として薔薇のごとく 窃窕[ようちょう]として小百合のごとし。
被衣[かずき]の輕羅[うすもの]燦々と 金銀珠玉にきらめきて、
その撫で肩に柳腰に 金髪亂れまつはれり。
海姫細眼に打ち笑ひ 悩殺一瞬、さてやをら

引き寄せられつ抱き寄せつ ふたりはむんづと相擁[よう]しぬ。
居士愛欲にいきり立ち 身も世もあらず搔き抱けば、
撲仁人[ぼくねんじん]殿見る見る皮剥げ 全身炎[ほのお]と燃へ立つ鼻息、
青菜に鹽殿、顔面紅潮、夢作殿、すわ迷夢一擲[てき]、
愚圖殿たちまち活氣に漲り 圓轉洒脫の妙なる振舞
戯[たわむ]れかかれれば相手もさる者 挑みに酬ゆる挑みの戯[ざ]れ事
雪をあざむく白妙の 被衣の輕羅[うすもの]打ちひろげ
頭の上からすっぽりと かぶせつ居士を生擒[いけど]ったり。
その輕羅の蠱[まじ]により 身は一瞬に羽化登仙、
白皚々[はくがいがい]たる深海の 水晶宮に遷されぬ、
その玲瓏[れいろう]に莊嚴に 金銀珠玉のきらめきに

呆氣に取られて言葉なく 目をしばだたく居士殿をば
あないとほしや可愛いやと 抱きて離さぬ海の姫、
居士は花婿、水精[ニンフ]は花嫁、今宵は晴れの婚禮よと
海の乙女等寄り集ひ 妙なる樂を奏で始めぬ。
妙なる樂の音[ね]につれて 歌ふ人魚の玉の聲、
歌に調べに浮き立ちて 競ふ百千[ももち]の踊り足、
舞に歌誦に音曲に 魂[たま]も奪はれ眼も眩[くら]み
狂氣の如く海姫を 擁[いだ]きに擁く戀の居士-----
此の時燦[さん]たる不夜城は 忽焉[こつえん]として搔き消えぬ。
茫然あたりを見廻せば いぶせき旧[もと]のわび住居、
泣いても笑ても怒っても 三文文士の下宿なり。